

公開・国際シンポジウム「礼拝像と奇跡 東西比較の試み」

## 中近世ヨーロッパにおける奇跡像

——芸術と信仰のはざままで

ゲアハルト・ヴォルフ  
秋山 聰 訳

1年半ほど前、私は21世紀COE「死生学の構築」シンポジウム『聖なるイメージ——彼岸とのコミュニケーションの手段として』に招かれて参加し、奥健夫、秋山聰氏らと共に、彼岸との回路としての聖像の諸相について論じた。今回は、これらの問題を、やはり近年比較文化的な視点から研究されている「奇跡」に焦点を置いて考察したい。様々な宗教的なコンテキストにおいて奇跡を起こす造形イメージの役割を辿りたい。これはあるいは文化や宗教の接触や摩擦ともいえる伝道や改宗といった問題とも関わることになりうる問題でもあるが、本論では、キリスト教の枠組みの中での、つまり中世から初期近世にかけての東方正教会と西方ラテン教会における問題に限定して論じることにした。

まず、いささか退屈に思われるかもしれないが、奇跡とは何か、という定義から始めたい。奇跡とは何だろうか？ 造形イメージはどのようにして奇跡を起こすのだろうか？ また、奇跡を起こすとはどのような意味においてなのだろうか？ さらに、第一の問いとも関連するのだが、造形イメージのかたちと奇跡の働きとの間にはどのような関係があるのだろうか、そもそも関係があるのかないのか、またそのようなダイナミズムをどのように表現するのか、といった諸問題が本論の主たるテーマとなる。

まず第一の問いから始めたい。キリスト教における奇跡の性質についてである。ここでは、奇跡とは何かについて我々がどう考えるかよりも、中世の

人々がどのように捉えていたかが重要となる。トマス・アクィナスの『神学大全』中に、今日でもなお有効性を保持しているとも言える奇跡についての体系だった説明がみられる。トマスによると、奇跡とは、「被造物の秩序を超越する神のエネルギー（羅：virtus）の伝達」と定義されている。トマスはさらに奇跡を三つのタイプに分類している。一つは「自然の法則に反する奇跡」（アンテ・ナトゥルム）で、たとえば、炉の中でも燃えなかった3人のユダヤ人の少年の場合である。次に、「自然の秩序の中にあるものの、例外的な奇跡」（プラエテール・ナトゥラム）で、たとえば、カナの婚礼においてキリストが水をワインに変えた奇跡が挙げられる。そして三つ目は、「自然を超えた奇跡」（スーペール・ナトゥラム）で、たとえば、神の受肉がこれにあたる。トマスはこの文脈で造形イメージによる奇跡の事例を挙げてはいないものの、イメージに関わる奇跡についての議論が存在することを認識はしており、またそうした奇跡の存在を否定もしていない。むしろ、自身の論を補強するために造形イメージによる奇跡に言及する際に、教義上問題を孕むような諸事例をも用いているほどである。キリストの聖血という聖遺物に対する崇敬の広まりを論じた個所で、トマスは、キリスト自身の傷口から出た血ではなく、敵によって傷つけられた聖画像から流れ出た血について論じている。実のところ、キリストの身体聖遺物としての聖血への崇敬は教義上深刻な問題となっていた。キリスト自身は栄光の肉体をもって復活し、昇天したにもかかわらず、なぜその血が地上に残りうるのか、という疑問に対して、聖画像から流れ出た血の方が問題が少ないと考えられ、事実中世や初期近世においてはこうした現象が頻繁に起こった。しばしば、聖画像はユダヤ人や不信心な人物によって傷つけられたと伝えられている。この点で、トマスにとっては「自然に反した奇跡」の方が、信条に反した崇敬よりはましなものであったのである。傷つけられた聖画像の最も有名な作例は、ローマのラテラノ宮の救世主キリストのイコン（図1）である。ユダヤ人が投げた石によって傷つけられたという痕がキリストの頬に残されている。

聖画像にまつわるこのような奇跡は、「画像に対してなされたことは、そこに表現された原型自体<sup>モデル</sup>に対してなされることと同じである」という定式に則つ

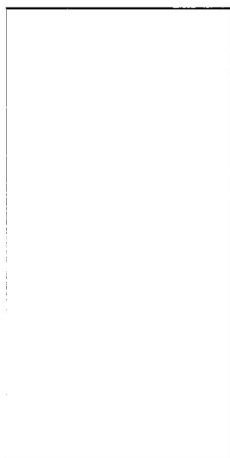


図1 ラテラノ宮の救世主キリストのアイコン、ローマ、ラテラノ宮サンクタ・サンクトールム礼拝堂

たものである。キリスト自身が像の中に存在しているがために、像はまるでそれが人であるかのように反応するのである。しかし、流れ出た血には、受肉したキリスト自身の血ではなく、むしろ聖餐の血とのアナロジーが適応されるのである。さらに時代を遡っても、同様の奇跡が起きていたことがわかる。画像をめぐる奇跡は、特定のかたち限定されているわけではなく、キリスト、マリア、諸聖人等の身体表現にも適用される。その意味で、ビザンティンや初期近世における偶像破壊運動の折、聖画像を擁護するために集められた数々の伝説の中で、この種の奇跡は大きな役割を果たすことになる。この脈絡においてとりわけ興味深いのは、像が自らの攻撃に対して苦しんだり、種々の反応をしたりしたことである。神がそれらを通してその意志を表しているの

であれば、画像は法的にも有効な究極の神聖な証となる。レオナルド・ダ・ヴィンチも『絵画論』の中で、神は画像を好む、あるいは、神は人々が聖画像を崇敬するために教会に詣でるのが好きなのだ、と述べている。もっともレオナルドはそこで、絵画という芸術を擁護するための便法として論じているのだが。

ここで、奇跡を起こす像を、①像が表された絵画や彫刻の空間の外側で奇跡を起こす像と、②様々な意味で、像自身が変容する奇跡を起こす像の二つのカテゴリーに分類しておこう。血を流す（が、傷はついていない）像の場合、この二つのちょうど中間に位置する。以下、奇跡を分類することがいかに難しいかを示す事例を見てゆくことになるが、いずれにせよ、この二つの種類に沿って論じてゆきたい。

規定された枠組みの内側で、あるいはその枠組に反抗するかのようにして、予測不能なやり方で権威を確立するような奇跡像が存在する。奇跡を起こすようになった聖母像が、元々置かれていた場所から動かされて、より重要な



図2 「サン・シストの聖母」、ローマ、  
サンタ・マリア・デル・ロザリオ教会

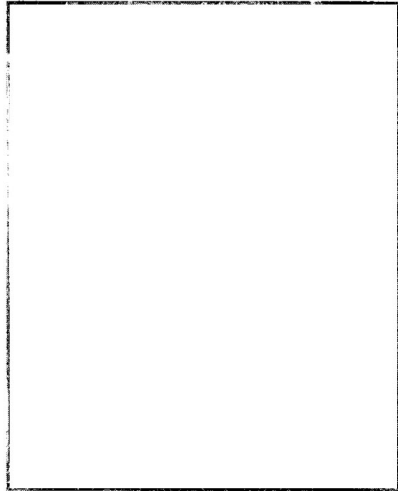


図3 ラテラノ宮の救世主キリストのイコン（銀製  
カヴァー付きの状態）

教会や大聖堂に移されようとしたケースが多くの伝説で語られている。その際、多くの像がしばしば元の場所から離れるのを拒むという。いかなる力をもってしても像を動かすことができなかつたり、像を運搬中の動物が動かなくなつたり、あるいは、ローマのカラカラ浴場近くの小さな教会からラテラノ宮に持ってこられるはずだった「サン・シストの聖母」（図2）のように、夜に空を飛んで元の場所に戻ってしまうケースもある。像は移動を拒み、その像によってしか自律性を保てない地域共同体の象徴として、存在し続けるのである。この種の奇跡では、通常、奇跡は像の外側で起こり、像のかたち自体は何ら影響を受けない。自然や政治による災害からの奇跡的救出や、病氣治癒などもこのカテゴリーに入るだろう。このような奇跡における像の役割を過小評価するわけにはいかない。たとえば8月14日、聖母被昇天の祝日の前夜の、ラテラノ宮の救世主キリスト・イコン（図1）の行列では、イコンは銀のカヴァーを装着され（図3）、布で覆われ、担架か木製の山車に載せられ数人の男性によって運ばれる。蠟燭が像の前に灯され、フォロ・ロマー



図4 フォロ・ロマーノ(1928年の写真)



図5 テイトゥス凱旋門

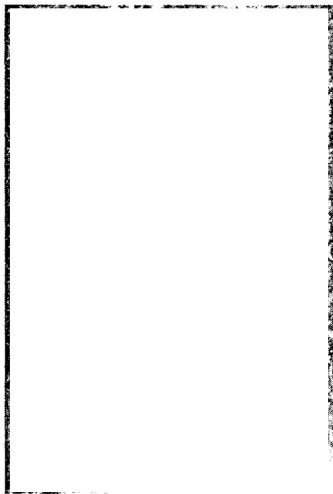


図6 ローマ、サンタ・マリア・マッジョーレ教会の聖母子像

ノの廃墟の中(図4)を夜間にまるで生きているかのように動きまわるのである。その折、このイコンが、神の審判者のように見えたとしても、あるいはイコンへの崇敬に恐れが混じっていたとしても不思議ではない。ティトゥス凱旋門(図5)を通過する際、玉座のキリスト像を描いたこの救世主イコンは、ユダヤ人への勝利を記念して建立された古代ローマの遺跡を、仮想の敵に対するキリストの勝利の再現の場に変えてしまうのである。その際、廃墟に棲む悪魔を駆逐したり、龍を追い払う奇跡が起こったとしても不思議ではない。かたちも重要ではあるが、この場合より重要なのは、聖母マ

リアのイコン(図6)が息子キリストのイコンを迎える場所であったサンタ・マリア・マッジョーレ教会へのラテラノ宮からの途次における儀礼的なイコンの祭り方や舞台装置であった。

第二のカテゴリーは、絵の外観が変化する奇跡である。これは通常、持続的ではなく、一時的に起きるもので、見る人々を巻き込む。ここでは、信

徒が教区教会で日頃から目にする像と同じ姿をした聖母マリアや聖人等が夢や幻視の中で目撃されるという多く伝えられている事例については取り挙げず、専らその外観が変容する聖画像について論じたい。体液の流出はしばしば見られる現象だが、ここでは血液ではなく、涙について取り上げたい。というのも、涙は傷つけられることにより流れ出る血よりも、より「自然」で複雑な心理的な働き、感情の一部であり、それらは絵画に内在する性質のものであるからだ。ここで我々は、画像が持つ、模倣しようとする性質と、奇跡的にも命あるものになる性質との境界が交差する地点に到達するのである。もちろん、これが決定的なプロセスであるというわけではない。ある方法により、ある場所で起こったとしても、他の場所では起こらないかもしれない。とはいえ、やはり、いろいろな意味において、かたちが重要な役割を担っていることは確かである。14世紀および15世紀は、そうした観点からしてもとりわけ興味深く、いまだ十分には解明されているとは言い難い領域である。とうのも、とくにこの時代においてこそ、芸術的次元がイメージの力を増幅させることに大いに貢献しており、奇跡の生起がキリスト像や聖人像の逼真性に起因したとも思われるのである。とりわけこのことは、磔刑像や聖母の半身像の場合にあてはまる。その背景には平信徒の世界、集団礼拝と個人礼拝を重視し悔悛を旨とする同信会の世界があった。イメージは個人と集団の祈念のための場を与え、そこでの瞑想はイメージと観者との対話を促したのである。サン・ダミアノ聖堂の磔刑像（図7）が聖フランチェスコに語りかけたという話（図8）がそのような対話のもっとも知られた例であり、同様の奇跡を期待する人々のために作られた磔刑像や聖母像は無数に存在する。しかしさらに、イメージとのこのような新しい「対話」に、もっと古くから存在していた画像も加わりはじめた。例えば、7、8世紀の卓越した蜜蝋画である「サン・シストの聖母」（図3）は、聖金曜日のために蒼ざめたという。またサンタ・マリア・アラチェリ教会にあるその12世紀のコピー（図9）は、「悲しみの聖母 *mater dolorosa*」として、人と神との間の仲介者とみなされていた。この二つのイコンは共に、観者の祈りを集約し、それを神の領域に届けることにより、そこには描かれていないキリストとイコンの観者との間に相



図7 伝サン・ダミアノ教会の磔刑像、アッシジ、サンタ・キアラ教会

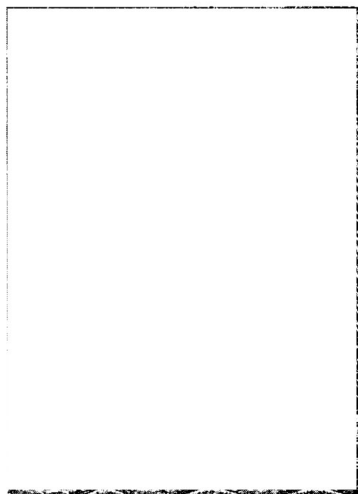


図8 ジョット派、『聖フランチェスコと聖ダミアノ教会の磔刑像』アッシジ、サン・フランチェスコ教会上堂壁画

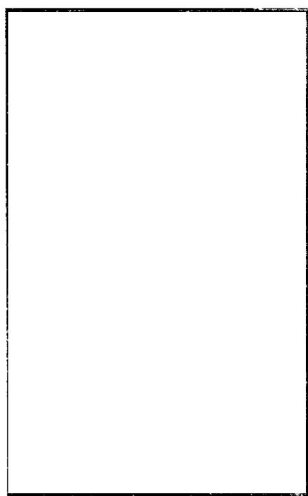


図9 ローマ、サンタ・マリア・イン・アラチェリ教会の聖母像

互交渉の「場 site」を生み出したのである。

多くの人々がこの聖母像がローマという都市をペストの大流行から救ったのだと信じたことは驚くに値しない。イコンの表面に看得られるようになるイメージと敬虔な観者との間の相互交渉とは、信徒の継続的な祈りにより蓄えられたエネルギーと、そのエネルギーを蓄えた上で時に奇跡という形で予測不能なかたちで返される余沢との、あるいは、奉納品と恩寵の流入との複雑な「交換」のプロセスと言えよう。こうした交換の中で、画期的な出来事として奇跡が生じるのである。言ってみれば、このような交換のプロセスこそが、イメージにとって奇跡が起きるための重要な

条件の一つなのだ。

イメージの与える心理学的インパクトは、芸術的次元によって強化され、観者の心理に操作を加えうる。奇跡とは効果であるとも言えるだろう。イメージは泣き、話し、動きもしたが、また絵画芸術の鑑賞の対象でもあった(図10)。私は、イメージと芸術との相違を時間的推移によって説明しようとするハンス・ベルティンクには与しない。むしろ彼の議論は誤りではないかとすら考えている。彼は高名な著書『イメージと儀礼』において、奇跡像の時代が芸術の

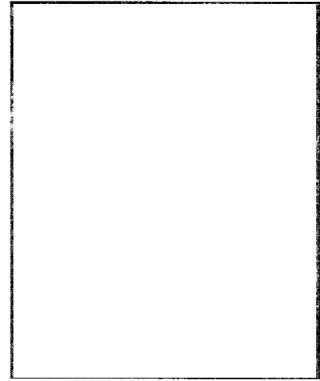


図10 プラート、サンタ・マリア・デル・カルチェリ教会の奇跡像

時代と重なりもすることを完全に無視している。15世紀から17世紀にかけて、奇跡像は手の込んだものも、素朴なものも数多残されており、これらはコロニアルな文脈においてのみならず、ヨーロッパにおける「フィールドワーク」によっても分析される必要があるのであり、その際、芸術とイメージの関係について既に確立されてしまった様々な固定観念から離れて、個々の事例の研究に専念しなければならないだろう。

この点を、14世紀後半から2世紀以上にかけてフィレンツェにおいてもっとも重要な聖像であった受胎告知のフレスコ画を一瞥することにより、再確認しておきたい。ここで取り上げるのは、サンティッシマ・アヌンツィアータ教会の壁画(図11)で、そこには聖母と天使が描かれているが、神から発された神聖な光と聖霊の方を向く聖母の顔は天使たちによって描かれたと信じられていた。15世紀前半のチェンニーノ・チェンニーニによる技法書にはこの絵が「色彩という手段によって受肉した」と形容されている。聖母の受胎の瞬間とは、彼女が神と人に対して開かれた瞬間でもある。天使による告知に反応したばかりの彼女の顔がここでも再び仲介の場となっている。この絵の奇跡の一つは、やはりこの聖像の現実の素材である色彩の変化に関わるものであった。この点は受難と受肉との相違こそあれ、「サン・シストの聖母」





図11 フィレンツェ、サンティッシマ・アマツィアータ教会の受胎告知壁画

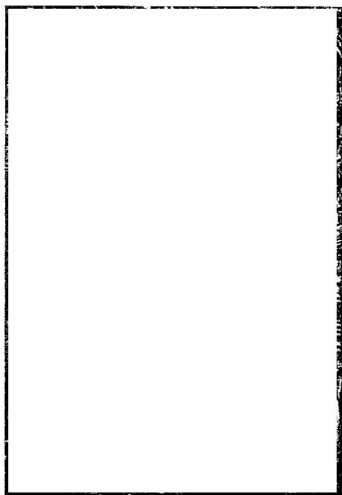


図12 サンティッシマ・アマツィアータ教会の受胎告知壁画のためのバルダッキーノ(天蓋)

と似ている。メディチ家により15世紀にバルダッキーノ(天蓋)の中に安置され(図12)、16世紀には国家的イコンとみなされるようになったこの受胎告知図は、数多の奇跡を起こした。そのためこの絵には数えきれないほどの量の蠟細工の奉納物が捧げられた。その量たるや教会を埋め尽くすほどで、教会を言わば蠟人形館に変えてしまったほどであった。これについてはアビ・ヴァールブルクが論じており、彼はこのプロセスを「イメージ魔術 Bildmagie」と呼び、自らの身体の痕跡や似像を奉納することによって自身を神聖なるものの近くに置きたいという願望について叙述している。しかしながら、彼は魔術という概念やそれについての議論を、奇跡的なるものという概念よりも好んでおり、奇跡を起こすこ

のフレスコ画についてはほとんど触れなかった。これは美術史学の言説における奇跡的なものに対する懐疑的姿勢の兆候を示している。奇跡は何かしら法則の埒外にあるものであるがために、我々のカテゴリーからある程度確実に逃れ出してしまうのである。

ここまで見てきたように、かたちと奇跡との間には相互作用があり、その共通の基盤とはイメージが生命を持つという点であった。かたちと奇跡との関係についての見取り図を完全なものとするためには、まったく正反対の現象が存在することも認めなければならない。そこにはまた二つの異なる次元が存在する。ひとつは、低俗な芸術の、あるいは素朴な奇跡像であり、経年により黒ずんだり、ほとんど見えなくなっていたり、人物像表現の境界線上にある醜いイメージである。聖母自身の謙譲とのアナロジーにおいて、非常に印象の薄い絵が、神聖な恵みの担い手となりうるのである。それらは観者に近づきやすさや親しみやすさを感じさせ、16世紀や17世紀の事例から知られるように、芸術的な祠が捧げられたりする。15世紀の街頭の聖母像の多くは、泣いたり、その他の種類の奇跡を起こし、後に教会の中に、多くの場合主祭壇上に移された。そこではそれらは芸術的に洗練された額縁の中に設置されるようになった。ここでは最も重要な事例を示しておきたい。サンタ・マリア・イン・ヴァリチェッラ教会の、ピーター・パウル・ルーベンスによる有名な祭壇画には、石の上に描かれた奇跡を起こすフレスコ画がはめ込まれており、その上には人の目に触れさせないための仕掛けとしてカバーが被せられており（図13）、特別な折にそれが取りはずされた（図14）のである。何も知らない巡礼や観者が奇跡が起こったと思うには、こうした仕掛けが貢献したのではないだろうか。通常イメージを覆っておいて、特別な祝日の折のみに提示するという自動の仕掛けによる開閉は、文献史料においては、しばしば奇跡的な出来事として言及されている。しかし多くの場合、これは奇跡という手段による神の介入というよりは、むしろ技術的発明の驚異的な効果という問題であった。

この他に、素朴なイメージの極端な事例としては、「アケイロポイエトス」と呼ばれる、人の手で作られたものではないイメージがある。これらは奇跡

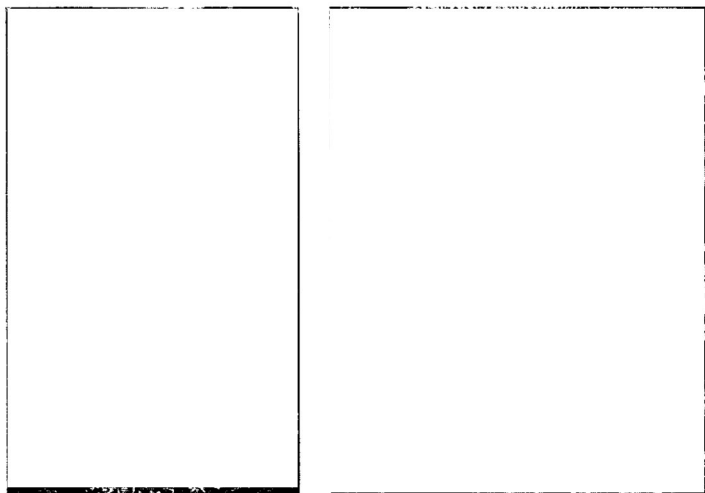


図13 (左) ローマ、サンタ・マリア・イン・ヴァリチェッラ教会祭壇画(ルーベンス作、1608年) 聖母子像が描かれたカヴァーの被せられた状態

図14 (右) 同上、覆いとしてのルーベンス作聖母子像トンドがはずされた状態

を起こしうるが、より重要であったのは、これらが奇跡的な方法で作られた、ないし出現したということであった。最も重要なこの種のキリスト像におけるように、押しつけられることによってとか、樹木の中や、井戸の中、あるいは最近のメキシコでのように地下鉄の駅の床の上で見つかるというように。あらゆる聖なるイメージの中で最高ランクに置かれるのはビザンティンでのマンディリオンや西欧でのヴェロニカだが、これらはそれほど積極的に奇跡を起こす像ではなかった。これらはむしろあらゆるイメージの真正性を保証する「原イメージ」であり、帝国や教会の普遍的な制度にとっての象徴である。

伝説によれば、これらはキリストの顔が布の上に押しつけられた跡であり、王や皇帝を癒したという。ビザンティンの史料は、しばしばマンディリオンの恐ろしさを強調している。マンディリオンを見ることは、危険を孕んだ行為とされ、祝祭行列に担ぎ出される際には、龕の中に納められたままであった。この14世紀のコピー(図15)は、失われた原画を同じ寸法で模写した

ものである。これは軍事のおよび経済的援助の保証としてジェノヴァにもたらされ、後にこのイタリアの港湾都市の「パラディウム（守護神的役割を果たす像）」となった。ここにはイメージと芸術との混淆が認められず、この二つの次元は画然と分かたれている。極めて繊細な金細工による額縁は、技芸の極みを示しており、えたいのしれないもののように現れ出づるキリストの面貌と鮮明な対照をなしている。額縁には聖遺物容器であるかのようにマンディリオンにまつわる物語が10場面、小さなタブレット状に表現されている。ここには「キリストの顔の奇跡的な複写」、「アブガル王の治癒」、「聖像のアンチテーゼたる偶像の崩落（図16）」、「タイル上への奇跡的な複写」、「マンディリオンに接した聖油によりもたらされたペルシア人に対する勝利」、

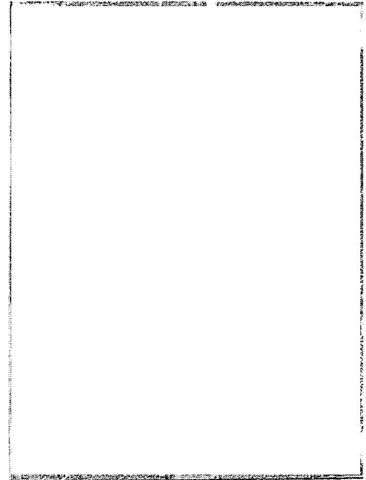


図15 マンディリオンのコピー  
ジェノヴァ、聖バルトロメオ・デリ・アルメニ教会



図16 図15の額縁から、「偶像の崩落」

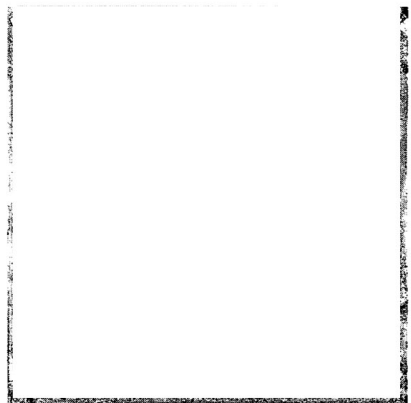


図17 図15の額縁から、「ユーフラテス河の横断」

「ユーフラテス河の横断（図17）」等の諸場面が含まれている。とりわけ最後の場面は二つの奇跡を含んでおり、興味深い。船が人の手を借りずに自然に河を進み、2人の司教の脇にいる若い男性から悪魔が追い払われる。図式的なかたちをした聖像と宙に浮かぶ古典的形姿を与えられた悪魔とは、イメージの奇跡的な力と芸術的発明のそれというエネルギーの二つの極を構成しているのである。同じ時代の西方ラテン世界では混じり合っていた力が、ビザンティンでは分離されているのを認めることができるだろう。

さらに、マンディリオンとヴェロニカのコピーという問題になると、議論は一層興味深くも入り組んだものとなる。前回のシンポジウムにおいて、我々はこの点についてある程度論じたので、ここでは簡潔に留めておきたいが、本論での焦点は異なる所に置かれることになる。マンディリオンとヴェロニカのコピーというものは、祈念像でもありえた。アミュレットのかたちをしたり、家の扉口の上に置かれたりすることによって、厄除けたりえたが、これらは泣き出す聖母像のように奇跡を引き起こすことはほとんどなかった。これらのコピーは原型（プロトタイプ）を直接参照することによってではなく、コピーであると認識することが可能な程度にイコン的図式を確立することによって、コピーとみなされる。人の手で作られたのではないイメージ（アケイロポイエトス）は、一旦コピーされるや、イメージ内イメージ（画中画もしくはメタ・イメージ）と化すのである。コピーは、神の恩寵を伝達することが出来、自らを観者の瞑想のための器として提供するけれども、奇跡を起こそうとは大抵の場合しない。

まとめに入ろう。マンディリオンについての検討は、中近世における奇跡像（芸術作品であれ、そうでないものであれ）の歴史について、新たに一つの根本的な論点をもたらしてくれた。新旧の様々なメディア（絵画、版画、メダル等）における複製（図18）という問題である。実際、版画も時には奇跡を起こすが、それは本論で論ずるところではない。重要なのはむしろイコン的プロトタイプとコピーとの関係である。時にコピーは篤い崇敬を集めるイメージの真正なコピーであることを自ら示しもすれば（とりわけ布教というコンテキストにおいてはしばしば起きる）、そうしたイメージの引用として

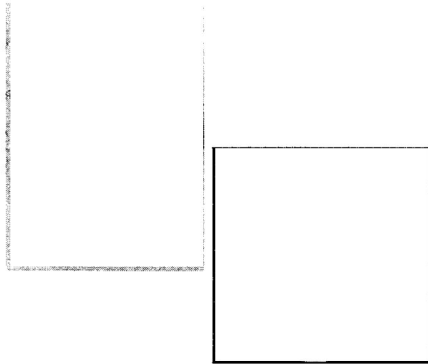


図18 ヴェロニカの様々な「複製」：巡礼記念バッジ (中上)、封印 (右)、メダル (中下)、祈念用版画 (左)

示されもする。ローマのサンタ・マリア・イン・アラチェリ教会で新たに発見された1300年頃のフレスコ画 (図19) には、カーテンの前の聖母像アイコンが描かれている。この像はただ単に聖母を示しているのではなく、ある像を引用しているのである。もう一例、ヴァイターレ・ダ・ポローニャによる絵 (図20) では、同信会の会士たちが半身の聖母像アイコンを崇敬している様が描かれている。特定の巡礼地やイメージを明確に指し示すアミュレットとして身に付けられた聖像コピーは、例えばロレートの聖母像であれ、ローマのサンタ・マリア・マッジョーレ教会の聖母像であれ、ヴェロニカのキリスト像であれ、無数に存在する。しかしながら、かたちの上では原型に近いにもかかわらずそれとの関係を否定し、コピーなどではない自律的なアイコンであると主張し、奇跡を起こし始めるようなコピーも存在する。

そのような事例として「サン・シストの聖母」と「アラチェリの聖母」のケースは非常に興味深い。後者は数百年の間フランチェスコ会修道士により管理されていたローマのカピトリノの丘上の教会の中心的な礼拝像であったのに対し、前者はドメニコ派女子修道院の中で半ば忘れ去られていた。と

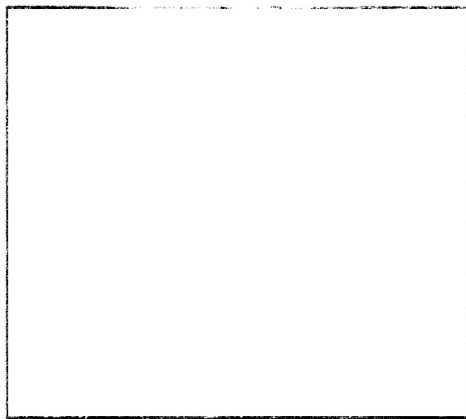


図19 ローマ、サンタ・マリア・イン・アラチェリ教会のフレスコ壁画

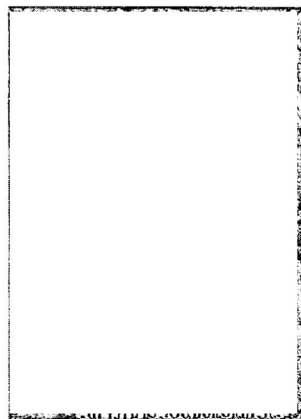


図20 ヴィターレ・ダ・ボローニャ《聖母子と同信会士たち》、ヴァチカン市国、ヴァチカン絵画館

ころが1960年代の修復によって「サン・シストの聖母」の方が今日の我々の感覚では「真」の原画であることが判明した。この議論を進めると、様式の問題に行きあたるざるをえないだろう。より一層の研究が望まれることだが、古いイメージをコピーしたり、新たに宗教イメージを作成したりする折には、しばしば古様（擬古的な様式）が用いられる。しかしまたそれとは反対の傾向もあるように思われる。少なくともこのアルカイズムという現象はこれまでとは異なる、より弁証法的な観点から捉えられうるだろう。つまり、聖像というものは、その外観をより当代にふさわしいものとするべく新しいイメージとしてコピーされうるのである。

奇跡像の歴史は、美術史にとって大いに重要なテーマである。それは、イメージのかたちと「力」との間の常に変化する関係について幾ばくかの示唆を与えてくれるだろう。さらに、今回はこれ以上論じるゆとりのない、「奇跡的なるもの the miraculous」と「驚異をもたらすもの the mirabile」との関係という三つ目のトピックが存在する。この二つの言葉は共に「～を見る」という意味のラテン語の mirare から派生したもので、中世後期以降意味の上では

しばしば混同された。神聖な奇跡と、芸術家（アルベルティによれば「もう一人の神」と形容されている）の称賛すべき作品および、才能豊かな人間による技術的発明は、聖像と観者との相互交渉が行われ、また生み出されもする聖なる空間の創出を分担しているのである。

#### ■参考文献

- M. Bacci, *Il pennello dell'Evangelista: storia delle immagini sacre attribuite a san Luca*, Pisa 1998.
- M. Bacci, "Pro remedio animae", in: *Immagini sacre e pratiche devozionali in Italia centrale (secoli XIII e XIV)*, Pisa 2000.
- M. Bacci, "Le bienheureux Gérard de Valenza, O.F.M.: images et croyances dans la Toscane du XIVe siècle", in: *Revue Mabillon LXXIII* (2001), pp. 97-119.
- H. Belting, *Bild und Kult: eine Geschichte des Bildes vor dem Zeitalter der Kunst*, München 1990.
- L. Canetti, "Immagini e statue miracolose tra Antichità e Medioevo", in: Id., *Il passero spennato*, Spoleto 2008, pp. 121-156.
- W. J. Connell / G. Constable, *Sacrilege and Redemption in Renaissance Florence: The Case of Antonio Rinaldeschi*, Toronto 2005.
- D. Freedberg, *The power of images: studies in the history and theory of response*, Chicago 1991.
- D. Gamboni, *Potential images: ambiguity and indeterminacy in modern art*, London 2002.
- M. E. Goodich, *Miracles and wonders: the development of the concept of miracle, 1150-1350*, Aldershot 2007.
- Icon and word: the power of images in Byzantium; studies presented to Robin Cormack*, eds. by A. Eastmond / L. James, Aldershot 2003.
- Il volto di Cristo*, eds. G. Morello / G. Wolf, Milano 2000.
- L. Kretzenbacher, *Das verletzte Kultbild: Voraussetzungen, Zeitschichten und Aussagewandel eines abendländischen Legendentypus*, München 1977.
- A. Lidov, *Miracle-working icons in Byzantium and old Rus*, Moscow 1996.
- Mandylyon: intorno al "Sacro Volto", da Bisanzio a Genova*, eds. G. Wolf / C. Dufour Bozzo / A. R. Calderoni Masetti, Milano 2004.
- R. Maniura, *Pilgrimage to images in the fifteenth century*, Woodbridge 2004.
- The Holy Face and the paradox of representation*, eds. H. L. Kessler / Gerhard Wolf, Bologna 1998



(*Villa Spelman colloquia* ; 6).

*The miraculous image in the late Middle Ages and Renaissance. Papers from a conference held at the Accademia di Danimarca in collaboration with the Biblioteca Hertziana (Max-Planck-Institut für Kunstgeschichte), Rome, 31 May-2 June 2003*, eds. Erik Thunø / G. Wolf, Rome 2004 (*Analecta Romana Instituti Danici : Supplementum* ; 35.2004).

B. Pentcheva, "The performative icon", in: *The Art Bulletin*, LXXXVIII (2006), pp. 631-655.

B. Pentcheva, *Icons and power : the Mother of God in Byzantium*, University Park 2006.

*The sacred image: East and West*, eds. R. Ousterhout / L. Brubaker, Urbana 1995.

J.-M. Sansterre, "Attitudes occidentales à l'égard des miracles d'images dans le Haut Moyen Age : Transmettre la foi au Moyen Age", in: *Annales HSS*, LIII (1998), pp. 1219-1241.

J.-M. Sansterre, "L'image blessée, l'image souffrante: quelques récits de miracles entre Orient et Occident (VI-XI siècle)", in: *Les images dans les sociétés médiévales: pour une histoire comparée. Actes du colloque international*, eds. J.-M. Sansterre / J.-C. Schmitt, *Bulletin de l'Istitut historique belge de Rome*, LXIX (2002), pp. 113-130.

J.-M. Sansterre, "Visions et miracles en relation avec le crucifix dans des récits des X<sup>e</sup> - XI<sup>e</sup> siècles", in: *Il Volto santo in Europa: culto e immagini del crocifisso nel medioevo*, eds. M. C. Ferrari / A. Meyer, Lucca 2005, pp. 387-406.

J.-C. Schmitt, "Rituels de l'image et récits de vision", in: *Testo e immagine nell'alto Medioevo*, Spoleto, 1994 (Settimane di studio del Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, 41.1993), pp. 419-459.

J.-C. Schmitt, "Imago : de l'image à l'imaginaire", in: *L'image : fonctions et usages des images dans l'Occident médiéval*, eds. J. Baschet / J.-C. Schmitt, Paris 1996, pp. 29-37.

J.-C. Schmitt, "Les reliques et les images", in: *Les reliques: objets, cultes, symboles. Actes du colloque international de l'Université du Littoral, 4-6 sept. 1997*, eds. E. Bozoky / A. M. Helvetius, Turnhout 1999, pp. 145-159.

J.-C. Schmitt, *Le corps des images: essais sur la culture visuelle au Moyen Age*, Paris 2002.

R. Trexler, "Florentine religious experience : the sacred image", in: *Studies in the Renaissance*, XIX (1972), pp. 7-41 (now in: Id, *Church and community, 1200-1600*, Roma 1987, pp. 37-74).

M. Vassilaki, "Bleeding icons", in: *Icon and word : the power of images in Byzantium*, eds. A. Eastmond / L. James, Aldershot 2003, pp. 121-133.

G. Wolf, *Salus populi Romani : die Geschichte römischer Kultbilder im Mittelalter*, Weinheim 1990.

- G. Wolf, "Kultbilder im Zeitalter des Barock", in *Religion und Religiosität im Zeitalter des Barock*. ed. D. Breuer, Wiesbaden 1995 (*Wolfenbütteler Arbeiten zur Barockforschung* ; 25) I, pp. 399-413.
- G. Wolf, *Schleier und Spiegel : Traditionen des Christusbildes und die Bildkonzepte der Renaissance*, München 2002.
- G. Wolf, "Le Madonne dei Monti : Perspektiven der Forschung zum Kultbild im Zeitalter der Konfessionalisierung", in: *Rahmen-Diskurse : Kultbilder im konfessionellen Zeitalter*, eds. D. Ganz / G. Henkel (*Kult Bild : Visualität und Religion in der Vormoderne*, ed. Thomas Lentjes, vol. 2), Berlin 2004), pp. 358-371.
- G. Wolf, "Icons and sites : cult images of the Virgin in medieval Rome", in: *Images of the Mother of God: perceptions of the Theotokos in Byzantium*, ed. M. Vassilaki, Aldershot 2005, pp. 23-49.

(ゲアハルト・ヴォルフ/Gerhard Wolf 在フレイレンツェ、マックス・プランク研究財団ドイツ美術史研究所所長)